

## 「建設業界の未来のために～私の願い～」

(インタビュー要旨)

土佐工業株式会社代表取締役社長 しばた ひさえ 柴田 久恵



船橋市にある土佐工業株式会社の柴田社長は、本業の傍らフリーペーパー「けんせつ姫」を発刊している。10月に県内の中学校1年生と高等学校1年生に、この「けんせつ姫」が配付された。今回は柴田社長に、建設業界での経験や「けんせつ姫」発刊の思いについてインタビューした。

### 1 はじめに

私は20歳の時建設業界に飛び込み、21歳で起業しました。その前まで私はサービス業界で働いていたのですが、「このままこの業界で働いていいのか」と悩んでいたある日、父から「ちょっと運転を手伝ってくれ」と言われました。当時私たちは神奈川県に住んでいて、父は建設会社の下請けの仕事をしていました。高台やUターンができない1本道の先にある住宅の下水道工事をしていたので、浄化槽用の土を積載したダンプで坂道を登って行ったり、ミラーを全部たたんでバックで細い私道に入って行ったりと、いろいろな経験をしました。大変でしたけれど、やっぱりチーム連携での仕事は面白いなと思いました。

ある時、本社から「下水道関係の仕事は、神奈川県ではだいぶ終わってきたけれど、千葉県はこれからだ。支店は仕事がたくさんあるので、行ってくれ」と言われ、私たち一家は引っ越し決心をし、千葉にやってきました。ところが、引っ越して1週間ほどで仕事がないと言うのです。私たちは請負なので、どんどん仕事を回していかなければお金が入ってきません。ですが、実際には支店の方では仕

事がたくさんあるという認識は全くなかったのです。「それならば、自分たちで仕事をするようにしなければいけない、会社を起こそう」ということになりました。

父はかつて会社を経営していたので、父が会社を起こし、私が2代目を継ぐという選択肢があり、そちらの方が楽だったかもしれません。しかし、父には「自分でやれ。そうしないと、その会社に対しての考え方や責任感とかが甘えになってしまう。自分で自分の会社を起こせば、やっぱり腹のくくり方が違う」と言われました。そもそも私には経営者になるという夢があったので、「じゃあやろうか」という感じで会社をつくりました。

### 2 建設業界での経験

私の父は建設業を営んでいましたが、過去に連鎖倒産をしています。私も家族もつらい経験をしていますので、「失敗したくない。同じ経験を味わいたくない」という思いを強く持っています。当時、男の世界と言われていた建設業界に20歳で飛び込みました。わからないことだらけだったので、教えてもらおうと質問したことが、「口を尖らせている」「生意気だ」という目で見られたこともありましたが、でも、失敗して損失がでたら、それが自分の会社に返ってくるので必死でした。時代的に刺々しくいかなければやっていけませんでした。

結婚して子供がいる今は、素でいられるようになって、楽になりました。業界的にも変わってきていて、女性も受け入れられ、言葉

遣いも変化を感じます。むしろ、女性に対して気を遣いすぎることになっていて、私が入った頃とは全然違ってきます。

この経験が、「けんせつ姫」発刊につながっています。「けんせつ姫」という名前ですが、女性をもてはやするのが目的ではありません。男性女性の特性を活かすことが大切だと考えています。力仕事は男性が長けているけれど、女性ならではの細やかさが必要な場面もあります。現場が一般宅の場合、その家の奥さんが一人で対応するとき、知らない男性の中に一人でも女性がいるだけで安心感をもってもらえます。職場の環境をよくすることは、女性だけでなく、全ての人のためになることです。例えば、「女性のために現場のトイレをきれいに」ということが言われていたのですが、男性だってきれいなトイレの方がよいに決まっているじゃないですか。こういう環境の改善からも女性の進出は業界全体の発展につながっていくと思うのです。

### 3 「けんせつ姫」発刊に向けた思い

親になって子供の未来のことを考えた時、「日本の建設業が衰退していったら」と心配になりました。例えば台風や大雪などの自然災害があった時、自衛隊などが活動をしますが、地元の建設業界も動きます。県の土木事務所から所属団体に指令が来るので、私たちはスタンバイします。もしこれがなかった場合、どんなひどい生活を送ることになるのか想像ができますか？今、人々が享受している快適な生活が送れなくなることになります。生活に必要なインフラを整備維持しているのは今の私たちです。業界の未来を考えた時、技術的な継承が必要となります。「後継者不足が深刻な今、種をまかないと・・・」という思いがありました。

そこで、この業界を身近に感じてくれたらと思い、「けんせつ姫」を始めたというわけ

です。建設業界はまだ一般的には男性の業界というイメージがあります。だからこそ女性である私が発信することで、若い人に「このおばさんが、家庭をもって、子供を育てながらやっているんだ」と思ってもらい、そしてその保護者にも「この業界に子供を入れてもいいかな」と考えてもらえれば、というのが発刊のねらいです。

しかし、実際に制作を始めてみるとわからないことだらけ。業者に依頼をしたこともありましたが、質を落とさず、いかにコストを下げて、よいものをつくるかとなると、本業の合間を縫って自分の時間を割くしかありませんが、甲斐あって、今では多くの方々に取り上げていただけるようになりました。

### 4 教職員の皆さんへ

はじめに、親の立場としてお話ししたいことは、子供が物の善悪を判断でき、社会でよりよく、より強く生きていけるようになるために「道徳」の重要性、責任の大切さをしっかり伝え続けてほしいということです。子供たちの柔軟な時期に長く関わるのが学校です。なぜダメなのか、なぜ必要なのか、厳しくも愛のある叱りや注意で大人への一歩を支えてほしいと思います。

次に企業人の立場としては、社会人になると芯を持った人間ほど強く働けるということです。学校では先生や保護者がバックアップをしてくれます。頑張ったことには「頑張ったね」と言ってもらえます。しかし社会に出ると、お金をもらうわけですから「頑張った」だけでは通らなくなります。100点中20点の仕事だけではクレームをもらうし、場合によっては補償が生じます。200点の仕事をして初めて次の仕事がもらえる、そういう世界です。自分の行動に責任を持つことの重要さ、そういう意味での「社会で自立できる大人」を意識して子供たちを育成してほしいと思います。